



五月雨を あつめて早し 最上川

まつおばしろう
松尾芭蕉

五月雨は梅雨に当たる季語です。旧暦5月は梅雨の頃で、その意味では「五月晴れ」は梅雨のさなかの晴れ間といえます。

この時季、雨が降らなければこれから田植えをする農家はもろいですが、既に植え付けた農作物などの成育が心配になります。折角のアジサイの花も、雨がないので心なしか色あせて見えます。予報では今年は暑い夏になりそうで、全国的に水不足の心配もあるようです。

「雨は愛のやうなものだ」
室生犀星の「雨の詩」はこう始まります。雨模様だと自分の都合で「あいにくの」と言ってしまうがちですが、近ごろの天候異変で、犀星に共感する人も多いのではないでしょう。これから梅雨前線が北上し各地で梅雨入ります。洗車、朝シャン、トイレでは音消しのために2度流し。

少し前にはなかった生活スタイルが当たり前になりました。日本の降水量は世界平均の2倍といわれますが、人口に換算すると4分の1にすぎないそうです。雨の降る季節も地域も偏ることを考えると「水の豊かな国」はどうやら錯覚なのかもしれません。

梅雨は「雨見時」ともいいます。犀星は「雨の詩」で「永い間雨をしみじみと眺めてゐた」と表現しています。時には降る雨を見つめる余裕をもち、水の恵みに思いを巡らせたいと思います。

所用で鹿児島を訪ねた日、西郷隆盛終焉の地である城山に行きましたが、桜島は雨に煙っていました。鹿児島では雨が降ると「島津雨」と呼んで縁起がいらしいです。島津氏の初代当主忠久の生まれた日が雨で、祝いの日に雨が降れば、一層めでたいといわれています。

さて、今年も早くも半分が過ぎようとしています。カレンダーを見ながら半年の間にあった善きことを思い、悪しきこと反省すべきことに思いをはせる人もいることでしょう。6月末日には古来「夏越の祓」があります。大みそかの大神から半年の間にたまった罪穢れを消す行事でもあります。

「父の日」。数年前「お父さんに贈る漢字一文字」を募ったところ「謝」が一番多かったそうです。「謝」とともに「継」もありました。

父とはそんな存在なのだと思ふ。あらためて文字をかみしめています。



指宿市長
豊留悦男